

広島県立美術館

研究紀要

第4号

船田玉樹と《水墨河童》について

—資料紹介・自作詩集『その河風をやめてくれ』『瘦河童』—

..... 永井明生 1

巖島図の振幅

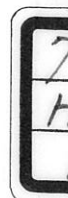
—広島県立美術館本の位置づけをめぐって— 知念 理 19

イギリス時代の南 薫造..... 藤崎 綾 50 (1)

資料紹介 当館蔵(ピップ・ラウ氏旧蔵)イカット・コレクションについて (1)

—中央アジア、ウズベクの絨— 福田浩子 44 (7)

2000



BULLETIN
OF
HIROSHIMA PREFECTURAL
ART MUSEUM

No.4

2000

HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM
HIROSHIMA JAPAN

5
B



(口絵1) 《河童の闇》 紙本墨画 44.0×33.8cm

船田玉樹と《水墨河童》について

— 資料紹介・自作詩集『その河風をやめてくれ』『瘦河童』 —

永井明生

はじめに

広島県呉市出身の船田玉樹は、戦前期の日本画における前衛表現を推し進めた画家として知られ、特に、ごく短期間ではあるが創立会員として参加した歷程美術協会^①に関しては、数多くの論考がすでに存在する。また、特別展の形では「近代の日本画 西洋との出会いと対話」(愛知県美術館、平成五年)をはじめ複数の展覧会で、その画業が部分的に紹介されてきている^②。しかし、玉樹の展開した創作の表現領域は幅広く、西洋のシュルレアリスムや抽象主義に触発された歷程時代を中心とする幻想的な作品のみならず、琳派に通底する装飾性豊かな屏風作品、水墨表現の可能性を追求した小品群、さらには油彩画や硝子^{ガラス}絵など、残された作品は実に多彩であつて、その全体像はいまだ十分には研究されていないのが現状である。全容の把握には、さらに長期的な調査と考察を要するが、本論考では、これまでほとんど紹介されることのなかった玉樹の側面を現段階までの調査をもとに叙述して、この特異な作家の業績を検証するための一つの試みとした

い。具体的には、昭和二〇年代後半から晩年まで描き続けられたとされる、水墨による「河童」の作品に焦点をあて、それに関連する二冊の自作詩集を資料として紹介する。玉樹自身、この詩集の序の中で「玉樹センセイといへば河童描きのセンセイかといふひとがあるそう。河童の詩画は僕の裸おどりであり泣き面であり必して自まんならぬけれども僕といふ人間のありのまゝの姿だから河童描きのセンセイといはれることは恥かしい様でも実は僕には満足だ。^③」と述べており、河童に関する詩画の創作に対して強い思い入れがあつたことがうかがわれる。本論に続けて、二つの詩集の全文を掲載するが、河童を自分自身の姿と重ね合わせながら綴られたそれらの言葉は、玉樹の抱く人生観の吐露でもあり、画家の絵画制作に対する姿勢の一端を探るための貴重な資料とも言えよう。この小論では、画家の生涯を辿りながら、その画業の中に占める河童作品の位置を確認するにとどめるが、今後も画家の多面性を捉えるための調査を継続していきたい。

—
船田玉樹(本名信夫)は、大正元(一九一二年)一月二九日、広

東京府美術館、三月七〜二十四日)に《椿》を出品し、入選している。

なお、玉樹は、昭和九・一〇(一九三九・四〇)年の時点では「柑子」という雅号を用いており^①、短期間

「桃鳩子」とも号したが、遅くとも翌一

一(一九三六)年以降、没するまで一貫

して「玉樹」と名のつた。「玉樹」とは

「すぐれて高潔な風采の人物の喩^②」で

あり、杜甫の漢詩「飲中八仙歌」中の一

節に用いられた言葉である^③。なお、柴

邨なる人物が玉樹に送ったとされる墨跡

(図3)に、この杜甫の詩及び田能村竹

田の「山中人饒舌」中の文章^④がしたた

められており、雅号の由来を証拠づける

資料として興味深い。

二

昭和一一(一九三六)年の第二三回院

展(東京・東京府美術館、九月二日〜一

〇月四日)に、《朝の花》で初入選を果

たす。この頃から、太平洋戦争の激化に

ともなつて美術界が戦時体制下に組み込

まれていくまでの七〜八年間は、数多く

の展覧会で前衛的な作品を中心に発表し

続け、実に活発な創作活動を展開した。



図4 《檸檬樹》昭和14年(第2回歴程美術協会展)

次に、出品歴を列記して、その経歴を整理しておく。

昭和一一(一九三六)年

第一回芸州美術協会展(広島・広島県産業奨励館、一月三〜二六日)

昭和一二(一九三七)年

第三回新日本画研究会展(東京・松坂屋、五月二四〜二九日)

第二回日本美術院展(東京・東京府美術館、九月二日〜一〇月三日)

昭和一三(一九三八)年

第一回清尚会展(東京・松坂屋、二月三〜七日)

第一回軌線美術展(京都・河原町ギャラリー、四月一〜三日)

第二回自由美術家協会展(東京・日本美術協会、五月三〜三一日)

第一回歴程美術協会展(東京・東京堂、一月一七〜二二日)

昭和一四(一九三九)年

第一回歴程美術協会試作展(東京・東京堂、三月二四〜二六日)

第三回自由美術家協会展(東京・日本美術協会、五月二〜三〇日)

第一回歴程美術協会京都展(京都・朝日会館画廊、五月二六〜二八日)

自由美術家協会関西展(大阪・大阪市立美術館、六月一五〜二二日)

第二回歴程美術協会展(東京・東京府美術館、七月八〜一四日)

丸木位里・船田玉樹個展(東京・紀伊国屋画廊、一〇月一六〜二〇日)

昭和一五(一九四〇)年

紀元二千六百年奉祝日本画大展覧会(京都・大礼記念京都美術館、四

月二〇日〜五月一五日/東京・東京府美術館、五月二五日〜六月一六日)

第四回自由美術家協会展(東京・日本美術協会、五月三〜三一日)

第二七回日本美術院展(東京・東京府美術館、九月一〜一八日)

第一回研究会展（東京・紀伊国屋画廊、一月二一〜二七日）

昭和一六（一九四二）年

第一回岩橋英遠・丸木位里・船田玉樹三人展（東京・松坂屋、一月

一〇〜一五日）

第二回美術文化協会展（東京・東京府美術館、四月二七日〜五月六日）

第二回研究会展（東京・紀伊国屋画廊、六月二〜六日）

第二八回日本美術院展（東京・東京府美術館、九月一〜二〇日）

第一回航空美術展（東京・高島屋、九月一三〜二二日）

昭和一七（一九四二）年

第二回岩橋英遠・丸木位里・船田玉樹三人展（東京・松坂屋、一月

三〇〜二月四日）

第二回璞友会展（東京・松坂屋、四月一〜五日）

第三回研究会展（東京・紀伊国屋画廊、五月四〜七日）

第二九回日本美術院展（東京・東京府美術館、九月一〜二〇日）

昭華会展（東京・東京美術館、一二月七〜九日）

昭和一八（一九四三）年

第一回有人会展（東京・松坂屋、五月二五〜三〇日）

冒頭でふれたとおり、この頃の作風には西洋の新しい美術動向（シ
ュルレアリスムや抽象主義など）の影響が色濃く、特に丸木位里との
相互影響のもとに試みられた水墨による実験的な抽象表現には特筆す
べきものがある。しかしその一方で、院展出品作などは、古社寺や歴
史上の人物を題材とした比較的穏健な画風とも言えるものであった。
その後、昭和一九（一九四四）年に応召、健康上の理由からその年除

隊して広島に帰り、以後故郷の地を離れることはなかった。実り多き
戦前期の玉樹については、さらなる掘り下げが必要であり、今後の課
題としておきたい。

三

戦後の玉樹は広島を創作活動の拠点としながら、断続的ながら引き
続き院展へ出品している。昭和二三（一九四八）年の第三三回院展か
ら日本美術院を辞す同三八（一九六三）年までの十六年間に、計十二
回出品し、そのうち第四〇・四一回院展（同三〇・三二年）では奨励
賞を連続受賞している。ちなみに、第四一回展に出品された《残照》

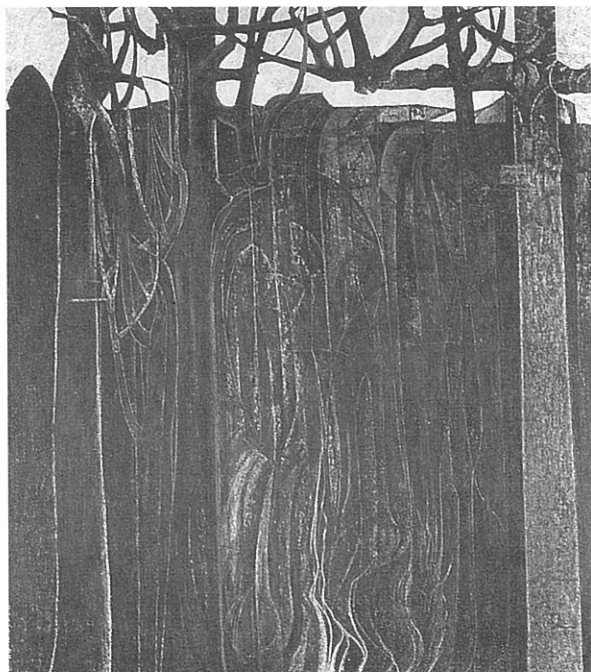


図5 《残照》昭和31年（第41回院展）

は、広島県立美術館が所蔵している(図5)。その後、新興美術院の理事となって新興美術院展への出品を重ねるが、同五三(一九七八)年には同院からも退き、以後は特定の画壇に所属することなく、個展を主な作品発表の場として制作三昧の日々を過ごした。

前述したとおり、戦後にはさらに幅広い表現への試みが展開される。琳派的な豊かな装飾性を有する桜図や梅図、少ない色数で象徴的にとらえられた松図、戦前からの

実践の延長線上にある水墨表現の可能性を追求した抽象作品(何百点にものぼる水墨山水図を含む)、扇面図、油彩画や硝子絵などに加え、今回紹介する一連の《水墨河童》、自画像群など、誠に多彩である。特に《水墨河童》については、大作を中心とする院展や新興美術院展への出品作の制作と並行して、すでに昭和二〇年代^⑤から晩年まで描き続けられているという事実には注目しなければならない。

現存する《水墨河童》の数は少ない。これまでの調査で実見した作品の点数は計五六

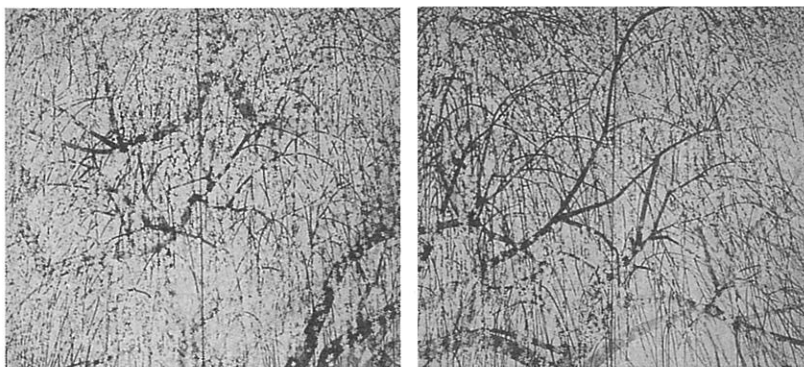


図6 《枝垂れ桜》昭和60年

点に過ぎず^⑥、それらの制作年代を正確に跡づけることは困難であるとはいえ、それらのほとんどが昭和四〇〜五〇年代に描かれたものと思われる(一部、昭和三〇年代に制作されたと考えられる作品がある)。内訳としては、額装されたものが一点(マット内寸三三・五×四八・〇cm)、マッティングのほどこされたものが計二六点(マット内寸三一・八×四六・三×二七・九×四六・五cm)、マクリの状態のものが計二九点(和紙寸法三四・四×四七・〇×三四・一×四七・二cm)である。色紙に描かれた多数の河童作品もあると言われているが、それらは現段階では一点も見出せなかった。論の最後に玉樹自作の詩(すべて河童に関するもの)を掲載することは前述したとおりであるが、昭和二〇年代に書かれたこれらの詩と直接関連する(同時代に描かれた)《水墨河童》の絵画作品が未だ見出せないため、文章と絵画との直接的な比較研究ができないことが非常に残念である。ただし、二冊の詩集それぞれに掲げられた「自序」の文章は、画家であると同時に生身の人間である玉樹の赤裸々な信条告白であり、それだけでもこの稀有な画家の一面を考察するための第一級の資料であることは間違いない。

昭和二〇年代の作品はおそらく含まれないであろうものの、肩に力が入っていない楽しさと哀愁にあふれたそれらの作品群は、詩的情感をたたえるとともに、文人画的な興趣に満ちている。少年時代より親しんできた詩の創作が思い合わされるが、やはりそれは玉樹の持つあの意味ロマンティックな気質の表れであるのだろう。気魄のこもった緊張感のある大作の制作と一見相反するようにも思われるが、それぞれがまぎれもなく玉樹の一面なのであり、画家の多面性の証左とし



図9 《河童沼》

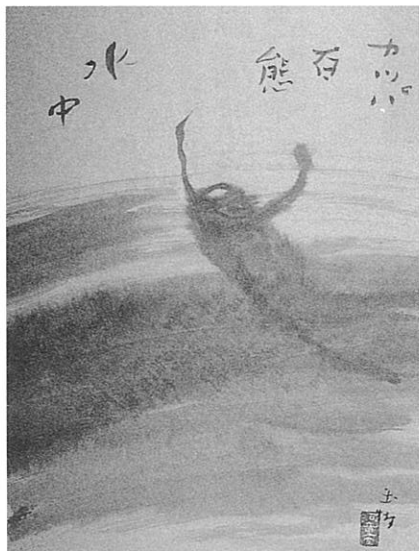


図11 《水中》

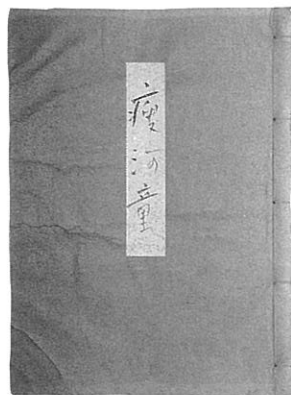


図14 『瘦河童』表紙

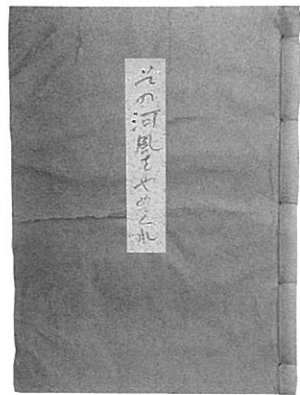


図13 『その河風をやめてくれ』表紙



図7 《河童の災難》



図10 9の落款



図8 7の落款

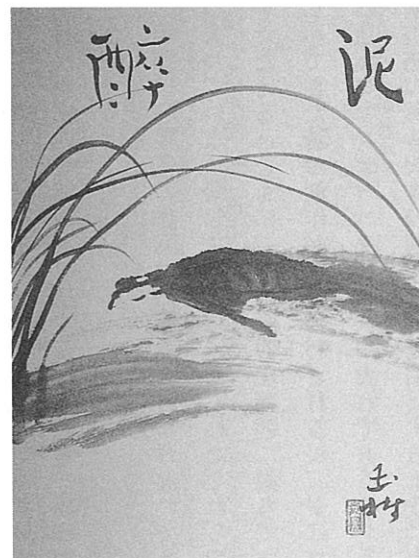


図12 《泥酔》

ておきたい。

河童を好んで描いた日本画家として真つ先に思い浮かぶのは小川芋錢である。すでに「船田玉樹と小川芋錢との親近性」は複数の研究者によって指摘されているが⁽⁵⁾、実際に芋錢からの影響があったのか、また、画人としての考え方に共感する部分があったのかなど、さらなる資料の収集と検証が必要である。ここでは、遺族による「よく話題にはしていたが、作風などへの影響はないと思う」との証言を記すにとどめておく。

なお、玉樹は昭和五二(一九七七)年に『水墨百題 船田玉樹作品図録No.1』を自費出版しており、その当時、『紅葉』『竹』『梅』『松』『雪』『大作』『旧作』『花』そして『水墨河童百題』の計一〇巻を最終的に刊行する予定としていた。このことから、玉樹自身『水墨河童』のシリーズを重要視していたことが察せられる。

船田玉樹の作品の持つ力は、いたずらに新しいものを追いかけるだけでなく、日本の古典の良さを見据えながら、美術全体の大きな流れの中で自らの作品のあり方を意識している点にあると思われる。いわゆる世俗の栄誉など追いかめない姿勢は、広くその存在を認知される機会を遠ざけてしまい、美術史の上で論じられることも必然的に少なくなってしまうのだが、真摯に自身の作品の芸術性を追求する作家こそを見出し、その研究を深めていくことが大切な課題としてあることを常に意識していかねばならない。最後に、今回の論考は船田玉樹研究のほんの端緒にすぎず、また数多くの貴重な資料の中のごく一部の紹介でしかないことを繰り返して述べておく。

【注】

(1) 昭和二三(一九三八)年に結成された美術団体。日本画家の船田玉樹、岩橋英遠、田口壮、馬場和夫、山岡良文、批評家の四宮潤一、洋画家の津田正周、版画家の浜口陽三らが創立会員であり、同年一月、丸木位里、江崎孝坪らを会員に加えて第一回展を開催。西洋美術の新しい動向を積極的に取り入れながら、さまざまな造形上の実験を通して表現の可能性を模索した。

(2) その他、「戦後日本画の一断面―模索と葛藤―」(山口県立美術館、昭和六一・一九八六年一月七日～二月九日)、「日本画の抽象―その日本的特質―」(〇美術館、平成六・一九九四年二月一日～三月九日)など。

(3) 本稿15ページ参照。

(4) この時期につくられたとされる短歌の一つに「桃盛る 雲仙岳の山麓 里の童と 親しみしかな」がある。

(5)(7)(8)(9)(10)「船田玉樹氏に聞く 回顧 昭和初期の広島美術から、歷程美術協会まで」(「広島美術の系譜―戦前の作品を中心に―」広島市現代美術館、平成三・一九九一年二月二日～三月二四日)

(6) 昭和四(一九二九)年に設置された、二科会の研究所。創立当初の「二科技藝」が「番衆技藝」と改称され、昭和一〇(一九三五)年にはさらに「二科美術研究所」と変わっている。「教課は絵画科も彫塑科も模型(石膏像)の写生から人体写生に進む順で、絵画では鉛筆デッサンが及第しないと、絵具は使わせなかった。また研究時間は絵画が午前午後三時間ずつ、彫塑は午前中三時間のみ、塾費は、月に絵画が五円、彫塑が七円、ほかに入塾の際の記名料十円を要した。」(瀧悌三「二科七〇年史 物語編 一九一四―一九四三」「二科七〇年史」(社団法人二科会・昭和六〇年))

(11) 速水御舟から「柑子」に宛てられた昭和一〇年一月三日付の書簡が現存する。

(12) 諸橋轍次『大漢和辭典 卷七』（大修館書店・昭和三年）

(13) 宗之瀟灑美少年

舉觴白眼望青天

皎如玉樹臨風前

〔唐代詩集上（中国古典文学大系 第一七卷）〕〔平凡社・昭和四四年〕

(14) 百年前書法画理。不能若今日之考究精博。悉力無遺也。而今人却不能及。愈詳愈降。益工而益俗。無它古之學者為己。今之學者為人。

〔大分県先哲叢書 田能村竹田 資料集 著述篇〕〔大分県教育委員会・平成四年〕

(15) 昭和二七（一九五二）年に、「河童の絵」展（広島・立町産経ホール、七月一五～二〇日）を開催し、作品二〇点を展示している。

(16) 平成四年の「船田玉樹展——一九四二年～一九六一年を中心として」（広島・蘭島閣美術館、三月一日～四月一九日）に、昭和三五（一九六〇）年作の《河童沼の夜》（紙本墨画、三二・五×四八・〇cm）が出品されているが、著者は未見である。

(17) 例えば、鈴木進・北川フラム対談「話題・船田玉樹——もうひとつの世界」（『アート85』昭和六〇年十一月・マリア書房）など。



図15 《バンザイ》

【資料1】

【凡例】

一、本資料は、画家の遺族のもとに残る自作詩集である。

一、本資料は、袋綴じ冊子、一冊。墨書。外寸三二・五×二三・七cm。昭和二十七年制作。

一、鶯色の厚紙を表と裏の表紙とする。表側には一六・二×三・二cmの和紙に書かれた外題「その河風をやめてくれ」が貼り付けてある。

一、表紙の次の第二丁表に「詩集 その河風をやめてくれ」。第二丁表に「詩集 その河風をやめてくれ 船田玉樹」および河童の絵、裏に「扉絵 長男 富士男 七才」。第三丁より自序、目次、各詩と続く。計三九丁。

一、古字は新字体に改めたが、その他明らかな誤字脱字以外は原本を忠実に転載した。

その河風をやめてくれ

自序

去年から河童画百点近くを描いて、僕はすっかり河童堂主人におさまったつもりでしたが、河童の詩一篇も生れないのはさみしいこ

とどつた。

それが、河童の靈感にふれたるにや！

興味わいておさまらず、一夜にしてこゝにおさめた詩全部を得た。

もともと詩人ならぬ画人のうた、自身の慰め以外のものではないが、はじめて河童の詩を得たよるこびのあまり、少数の心の友に読んで貰はうと思ひ立ち、ここに自筆の集を編んだ次第。河童が星を恋ふの状河童堂主人のことならんと御笑い下されば僕の本懐とするところ。

扉につかつてある河童図は（帽子をかむりランドセルを背負い靴をはいた、自画像の如し）長男富士男の筆になるもの、こゝんところへ河童を描いてごらんと言つたらよるこんでかいてくれたもの。僕が懸命に筆写をしているところへ来て横合いから読む。一年生でも仮名の多い詩だから僕にきゝながら読む。

どうもめんどうなので大人になつたらよくわかるからその時読むとよらしいと教へたら得心してあつちへ行つた。実は河童が星を想ふといふ風な詩なので子供に對して照れたといふわけ。日本の絵では徳川時代の浮世絵以外愛情のことにふれる絵を見ない。特に日本画

家は聖人君子然としなくては絵が売れないのだから、僕のこれ等の詩はめつたに人に見せられんといふわけです。

聖人君子然といふのは他人事ではない。ずい分恥知らずの気まま勝手をやつて来たことに於ては人後におちぬつもり僕でも、気持ちのどこかで君子然としなくてはいけないのだといふ心がうごいていて（うごくだけで一向君子然としないのだが）この職業意識が全くいやだった。僕が河童画を描いたらバカにした者もあつたらうが僕がまだかちかちの人間でないと知つてよるこんでくれた者も沢山あつた。こゝに河童の詩を発表することはそうした意味で下手すれば妙な老境に入りそうな男がそうであつてはならないと、大いに若返つたつもりを見せた、といふことになります。まことに恥づかしいことです。

昭和廿七年十一月十四日夜

河童堂主人記

目次

— その河風をやめてくれ

— 河童が木の葉に

— 片想ひ

— いろはにほへと

— ねむれない夜は

— チラチラ雪の

— わしの河童を

— 月下河童

— 真珠

— 老いさらばへて僕がいると

— 星は河童の水から生れる

— 聖なる河童

— 河童ははづかしがりなのだ

— 河童はいたといふこと

— 僕が河童になるのこと

— 河童も恋をするといへば

その河風をやめてくれ

深いみどりどりと黒と黄と

その手のひらを

銀のしづくが

河童の笑ひを消す風ぢや

あの河風を

やめてくれ

河童が木の葉に

河童が木の葉に

なつたげな

そぢやけん木の葉が

水底の

そぢやけん河童が

泣かんでも

木の葉が泣くと

いふもんぢや

片想ひ

河童の恋のおかしさは

河童の甲羅のあの重さ

恋の重荷の哀しさは

岸辺の石のつめたさを

こがるゝわれの

片想ひ

いろはにほへと

河童河童の申すよう

いろはにほへと散りがてに

ばかりと浮けば春の月

つめたき人の

恋しかりけり

ねむれない夜は

ねむれない夜は

河童のおもひ

水のつめたさ

夜の長さ

月もないのにほのあかるいは

河童にゆれる夜光虫

あゝせつないといふことを

河童の言葉でいふならば

彼の詩人の口ぐせの

ララララララララララ

チラチラ雪の

チラチラ雪の降る夜さに

岸辺の石にたゞずむは

恋の河童か幻か

待てど来ぬひと

にくらしや

わしの河童を

むかしむかしのそのむかし

そのまた遠きものがたり

遠きはなしのはしくれに

わしの河童を

置いてくれ

月下河童

夢遊外出

千里萬里

酔歩孤影

月下河童

河童悪童

河童仙童

恋々河童

哀々河童

真珠

おろかな河童をゆるし下さい

彼の河童のまなじりの

その糸すじの涙をみれば

みにくい土色の水かきある掌に

僕の秘蔵の真珠の玉を

そつと握らせてやらずに居れぬ

僕の大事な真珠の玉は

いつかあなたにあげようと

思つてたそれなのに

河童を見ればやらずに居れぬ

河童は泣くをやめて真珠を見た

河童はうれしいにちがいない

あゝその真珠の光のまばゆさ

こんなつゝしみ深い美しさがあるうか

あゝ美しいと

言はうとしたら

真珠は消えてしまつたのだ

消え去つたものはかへらない

おろかな河童の掌に

小石が一つ残つているのを

その小石の心など

しよせんあなたにわかりつこない

わかりつこないと僕が言つたら

河童は僕に叱られたと感ちがいで

よたよた行つてしまつたのです

おろかな河童をゆるして下さい

老いさらばへて僕がいると

老いさらばへて僕がいると

幼い河童が寄つて来た

河童の子供の小ささを

ものにたとへていふならば

マッチの箱に三匹は

充分に入ろうといふもんだ

老いたる僕はかんがへた

マッチの箱に河童を入れた

マッチの箱の河童の声を

ものにたとへていふならば

神と悪魔の申し子の

出来そこないといつたところか

その泣声をきいているうち

不思議なことに身内がもえたち

若い命がやつて来た

ふかいいかりがやつて来た

悔いの心も恋しいおもいも

すぎ去つた若い日そのまゝで

あつたので

老いさらばへていた者は

耐えられよう筈がなく

恥づかしながらへたばつた

死んだ様に

へたばつたのだ

星は河童の水から生れる

河童は水にとけてしまふ

河童の水は青ぐろい

その青ぐろがうすらいで

あけ方の紺青に変つた時

水の中から星が生れるといふことを

とうのむかし教へてくれたは

幼いあなただつたではないか

あの頃から

僕はあなたが好きだつた

あなたの幼い物語が真実となり

僕が河童の精に魅いられて

河童となり

かうして水にとけてしまつたのを

僕は必してうらんでもはいない

そのしようこには

やがて明方がやつて来て

あなたが星になつて生れてくるのを

僕は信じて待つているのだ

聖河童

河童のおよいだ水あとが

うすもゝ色に染つたのは

天変の予告といふもんだ

もうこの水には河童はいない

いないのではない実はいるのだ

無数の河童が水底にいるのだ

泥に化けてしづまつているのだ

天変の予告に従い

化身自在の河童達は

尊い聖の心にかへつて

水底にねむつてい

河童は恥かしがりなのだ

僕が河童を飼つて

いつの間にかひと

見せろと言つてこ

河童は恥かしがり

ひやかしたりしたら

すぐ死ぬのだ

いやな者を見ただけ

病気になるのだ

だから誰にも見

実は飼主の僕だつ

一度も見ないとい

およそわかつてく

僕が河童になるのこと

河童をつれて歩いて

みんながうらやまし

僕は少々得意になつ

日頃貧乏エカキと

思いきりにらんで

だから見ている

僕がみんな笑つた

人ごみの中から寄つて来た奴がある
おそろしくしかつめらしい言い方で
もしもしエカキさん

何処迄行くのでありますか
さうさなあと僕がいふ

地球の果迄行つてみるかな

人達はいなくなつた

河童と僕と二人（いや二匹かな）

静かな旅がはじまつた

河童のキヨトンとした面附

ずるそうではさうで

泣きそうなそいつの顔が

時々ひきつゝた様になると

ハ、ン腹がへつたナと察する

そこで僕は親切をする

あゝいつも女の子等に

こんな親切したいもんだとかんがへる

河童にそこの草をとつてやる

さあおたべといふ

（女の子ならおこつてしまふ）

河童はもぐもぐとくう

（ハテ河童は草は食はぬものだつたが）

河童はチラチラ僕を見る

チラチラ見ながら泣いているのだ

草一本おたべと言つたそれだけで

河童は心からよろこぶのだ

そのうれしさに泣いてるのだ

僕だつてこんなやさしい奴を

可愛いゝと思はずにいられない

河童君もつと行かう

僕等は人間のいないところ迄歩くん

どうとう地球の果迄来た

何萬年も歩いて来たのだ

そこに大きな沼があつた

河童はこゝで生れたのだ

河童の故郷といふわけだ

生れたところに来たよろこびに

河童は急にたくましくなり

おごそかな姿になつた

河童はバカではなかつたのだ

神通自在の河童の本性を

みるみるうちに現はした

軽々と僕をだきあげ

音もなく沼にとびこんだ

僕等は泳いだ

ずい分楽しく泳いだ

いくら泳いでもつかれなかつた

河童の沼のひろいことは

僕等が又も何萬年も

泳ぎつゞけているといふのに

岸の見えないことだつた

岸の見えないことなど問題でない

泳げば泳ぐほどうれしいのだ

ずい分泳いだねと僕が言つた

河童は黙つて目をあげた

その目が星のまたたきだ

またたく度に星が生れて

空一面が星になつた

その星の一つに見覚がある

ながい間想いつゞけた星だつたから

僕にはいつでもわかるんだ

君が僕の星になつたのは

僕が君を恋しく思つた時からだ

なつかしい星だつた

こんな遠いゝところへ来たのも

君に逢いたい為だつたのか

おもはず君を呼ばうとしたら

僕の声は君の名にならなくて

キヤキユキユといふ河童語が

河童の声でひゞいたのだ

僕は河童になつたのだ

僕は河童になつたのだ

みにくい河童になつたのだ
だけど悔いはしなかつた
かなしいとも恥かしいとも
僕はおもいはしなかつた
恋しい星のきらめく方へ
泳いでいるだけで
満足だつた
満足だつた

河童も恋をするといへば

河童も恋をするといへば
人はけんな顔をする
いやらしいと思ひ
コツケイと思ふ
河童の心は知られない
河童の願いはわからない
河童のかなしい恋のことなど
そこの人にはわからない
かなしくてもおかしくても
河童も恋をするのです
河童の恋はいつもつめたい
河童のからだがつめたいから
心はどんなに燃えていても

その頬も腕も甲羅も
氷の様につめたいのだ
頬をよせればよせるほど
そのつめたさはつめたくなる
いだき合つても温まりはせぬ
水かきのあるつめたい掌は
相手のかたくてつめたい甲羅を
抱くばかりだから哀しい
一つになればなるほど
寄り添へば添うほど
つめたく凍つてしまうのだ
こんなバカげたことがあるうか
河童の恋ほど切ないものがあるうか
かはいそうでたまらない
河童の心がわかつて来ると
僕は泣かずにいられない
僕がオイオイ声たゝて泣いていると
河童がけんな顔をして
沼辺の花を呉れたのだ

【資料2】

【凡例】

一、本資料は、画家の遺族のもとに残る自作詩集である。

一、本資料は、袋綴じ冊子、一冊。墨書。外寸三二・五×二三・七cm。昭和二九年制作。

一、鶯色の厚紙を表と裏の表紙とする。表側には一六・二×三三・二cmの和紙に書かれた外題「瘦河童」が貼り付けてある。

一、表紙の次の第一丁表に「詩集 瘦河童」、裏に「船田玉樹」。第三丁表裏に自序。第四丁表に「詩集 瘦河童」および河童の絵、裏に「扉絵 二男 洋七才」。第五丁より各詩が続く。計二三丁。

一、古字は新字体に改めたが、その他明らかな誤字脱字以外は原本を忠実に転載した。

瘦河童

自序

玉樹センセイといへば河童描きのセンセいかといふひとがあるそう。河童の詩画は僕の裸おどりであり泣き面であり必して自まんにならぬけれど僕といふ人間のありのまゝの

姿だから河童描きのセンセイといはれることは恥かしい様でも実は僕には満足だ。「その河風をやめてくれ」以後時たま産れた河童の詩をまとめておいたのが「瘦河童」だ。

河童屋亭主

沼のほとりの松の

沼の
ほとりの松の
松の梢の
あの夕の星の
金色を
わしの河童が
ほしがつたのよ
沼の
ほとりの松の
松の梢の
あの夕の星の
金色を
わしの河童が

ほしがつたのよ

月に浮き浮き

月に浮き浮き河童共
ぬれてしよぼけているけれど
おどり忘れぬ心がけ
ビシヤビシヤいふのは
手びようしか
ドタドタおどりぢやあるけれど
おどりおどれば
うさばらし
かはいや甲羅が
重うござる

河童沼の夜だ

河童沼の夜だ
河童もさみしくて
かなわない
月のない夜だ
泣いたつて
しようがないのだが
一人(いや一匹)でいると

何だか

泣きたくなつて

それで河童が

泣いていた

わしの河童は

わしの河童は

おかしな河童

伊達な若衆に

化けそこなつて

村の娘ツ子に

なぐられた

わしの河童は

おかしな河童

チヨコに三杯

酒のませたら

昔想うて

泣きやまぬ

石を相手に

河童の世界にも

うるさい事があるげな

うるさいからとて

河童を廃業出来ぬげな

仕方ないから

一人(いや一匹)に

なつてみたげな

一人(いや一匹)では

淋しいげな

仕方ないから河童メは

石を相手に

えらんだげなよ

石は黙つて言はぬげな

仕方ないから河童メは

石を相手に

河童メは

一人(いや一匹)で

泣いたり笑つたりして

一人(いや一匹)で

遊んだげなよ

瘦河童

河童の沼の夕焼けぢや

赤々ほんまに夕焼けぢや

出て来い河童河童やい

出て来た河童は瘦河童

出て来たとたんひつこんだ

出て来い出て来い河童やい

河童の沼の夕焼けぢや

風吹きや風も

真赤ぢやぞ

醒めて汝の心を明かせ

池中にねむる河童よ醒めよ

千年にわたる汝のねむりは

死にひとしきねむりなれども

死にあらぬしようこには

醒めて水をつめたきを知り

浮きあがりて天の高きをなつかしみ

むかしちぎりしものを呼ぶを得ん

うらやましきねむりなるかな

河童よめざめよとわが言は

隣人のせつかちと嘲ふらん

されど

されど河童よわが河童よ

汝めざめずこのまゝならば

猶万年もねむるつもり
汝ならば

いかにゆつくりなるわれといへど
醒めよと言いだきものと知れよ

さるにてもねむれる河童の

死にひとしき静かさよ

あゝ生と死のけぢめ無き

河童なるか水なるか泥なるか

わからざる河童よ

醒めて汝の心を明かせ

甲羅

甲羅を背負つて立つているのは何処の誰か

河童かと思つたら君だつたのか

いや君でもあるが僕だつたのだ

君も僕も河童なのだ

頭の皿の

水はかわいた

生きることは生きることは

つらいことかいやいや違う生きることは

生きてあることは有難いことだ

生きてあることは不思議なことだ

君も僕も河童なのだ

甲羅があるから生きている河童なのだ

甲羅をはずせば死んでしまう河童なのだ

君も僕も

河童なのだ

客人

はらをたてたりかなしんだり

生きてれば毎日それをくりかへす

どんな強い心でも

どんななかしこい頭でも

くもりといふものはあるだろう

凡人である僕如きが

平静でいられないのはあたりまへだ

僕の河童は僕の客人

僕を見舞つてくれる客人だ

怪異でみにくい風態でも

この客人のやさしい心は

人の心をときほぐす

重そうなその甲羅をみてみると

河童こそかわいそうだと僕は思う

笑つても泣いてる様な客人河童

つらいのは河童だと僕は知るので

やさしい河童

やさしい河童は

おこつたりしない

野良犬にほえられても

その手をたゞさしのべるだけだ

僕等腹立て人間は

河童のことを想うがよい

夢の中もおこつてゐる者共は

やさしい河童を

想はうよ

かつばなんぞゐるわけではないのに

かつばなんぞゐるわけではないのに

ゐるわけではないにきまつてゐるのに

かつばは人の心に住んでゐる

かつばは人の心のうちでも

やさしいさみしい心が好きらしい

やさしいさみしい人をみつけると

いつのまにかやつて来るかつば

おどけておどつてみせる

河童話で歌う

こわそうな顔をしてても

やさしいのだ

かしこいかと思ふと

バカなのだ

それでいて

天意を心得ているのがかつばなのだ

かつばなどいるわけはないのに

それなのにいるといふのがかつばなのだ

かつばはそういふものなのだ

かつばは

そうですその通り

客は僕の河童です

【付記】

本稿をなすにあたり、船田辰子氏、船田奇岑氏に多大なご協力、ご教示を賜りました。末筆ながらここに記し、厚くお礼申し上げます。

夜中の客

夜おそく迄仕事をしていると

僕が一人なのを知っているのか

こつそりなぐさめにやつて来る

夜中の客はおしやべりなどしない

いるのかいないのかわからない

だまつてそこにいるらしい

外には風が吹いている

いるのかいないのかわからない客人は

なかく、心得た客人で

僕と一緒に風の音をきいている

客といふのは河童のことだと

すでに読者は知っている

(ながいあきお／当館学芸員)

広島県立美術館 研究紀要 第4号
BULLETIN OF HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM No.4

発行日 2000年3月22日

編集・発行 広島県立美術館

Hiroshima Prefectural Art Museum

〒730-0014 広島市中区上鞆町2-22

2-22 kaminobori-cho Naka-ku Hiroshima City 730-0014 JAPAN

Tel.082-221-6246 Fax.082-223-1444

印刷 有限会社 清弘社

〒730-0802 広島市中区本川町2丁目3-8

Tel.082-232-3251 Fax.082-231-9601